

### サンディエゴ計画の謎

サンディエゴ計画は、テキサスからカリフォルニアに向け、州政府を転覆してメキシコへ編入するという、誰が見ても実行不可能な計画である。テハノはこれによって勇気付けられたのだろうか。それとも、地域を占領してメキシコへ併合するつもりは毛頭なく、ただアングロへ仕返しをしたかっただけなのか。アメリカ人を殺し、鉄道線路を燃やし、アメリカ軍へ発砲した者たちの誰も、それについては語っていない。しかし、このマニフェストは偶然に出てきたものではなく、明らかに南テキサスでの緊張とメキシコ革命を反映したものである。革命分派を超えて誰にも受け入れられる愛国心に訴え、はっきりとアメリカだけを槍玉に挙げ、「平等と独立」をスローガンに掲げている。エミリアノ・サパタのように、村人への土地返還や、フロレス・マゴン兄弟のように無政府主義を標榜しているわけではない。マニフェストはアメリカにおいてメキシコ人と同じように迫害を受けた、他の民族にも言及し、アフリカ系アメリカ人の独立と、アメリカン・インディアン、特にメキシコ北部開拓時代に衝突を繰り返したアパッチへの土地の返却を唱えている。<sup>112</sup>

しかし他のアジア人の中で、何故日本人なのか。カランサ陰謀説をとる者は、カランサが日本の援助を取り付けるためとしているが、実際に効果があったとは思われない。マニフェストの作成者は、メキシコ人から憎まれていた中国人よりは、武器を取って革命に投じた日本人をより身近に感じていたことは間違いない。

改訂版マニフェストは「アメリカの虐げられた人々へのマニフェスト」と題し、窮地に追い込まれたテハノの憤りで満ちている。改訂版の署名者はバシリオ・ラモスの持っていたマニフェストの署名者とは異なっている。但し、「Rebellion on the Borderlands」の著者 James A. Sandos はオリジナルの署名者アグスティン・ガルサはレオン・カバヨという別名で改訂版に署名したとしている。<sup>112</sup>

改訂版の日付はオリジナルで決起の日として指定された1915年2月20日で、署名者はサンディエゴ計画で組織された革命評議会のメンバーであるとされている。南テキサスのアングロは、毎日のリンチに飽き足らず、民族大虐殺に乗り出したこと、更に隔離主義について、学校、ホテル、劇場、全ての公共施設で、メキシコ人、黒人、黄色人種にたいして門戸を閉ざし、鉄道や集会所などでは肌の白い野蛮人は上位階級として我々を隔離している、と新しいマニフェストは指摘している。オリジナルでは触れていない社会革命に言及し、耕地をプロレタリアと革命戦士に返し、状況によって個人の所有とするか、公共の土地にするかを決定する、としている。鉄道は公共の交通機関として共有し、学校では人種や国籍に関係なく、博愛主義を教えると約束した。新たにユタ、ネヴァダ州を加え、虐げられた人々や、卑しまれた人種は終には迫害者を倒し、万人が兄弟愛で結ばれる新しい共和国建設を目指す、と締めくくっている。<sup>113</sup>

当時のアングロやテハノにとって、また傍観していたメキシコ人にとっても同じように、

この二つ目のマニフェストがどうして出てきたのか、恐らく不可解であったと思われる。さらに1915年7月に始まった攻撃が本当に二つのマニフェストによるものかどうか、疑問が残る。改訂版で追加された内容を見ると、その作者はオリジナルと比較し、更に急進的で、テキサス州におけるテハノやメキシコ人の怒りを充分理解し、闘争的な声明文によって、より多くの者を引き寄せることが出来ると考えていたものと思われる。リヘネラシオンの購読者であれば、土地分配やインフラの共有など、作者がPLMの影響を強く受けた者であることを直感したであろう。一方、オリジナルで唱えられた厳格な軍隊組織はそっくりそのまま踏襲されていて、PLMの考え方と矛盾している。寧ろタマウリパスで土地の分配を断行しようとして、カランサに妨害された急進的な憲政軍ジェネラル・ルシオ・ブランコが書いたロス・ボレゴスと呼ばれた土地分配計画に酷似している。サンディエゴ計画のマニフェストの著者は一体誰なのか、そして誰の陰謀なのか。それは未だに謎のままである。114

“Rebellion in Texas”の著者ベンジャミン・ハーバー・ジョンソン(Benjamin Heber Johnson)は、次のように述べている。「・・・ピクトリアノ・ウエルタ信奉者である彼と彼の仲間が、モンテレーの獄中で起草したというバシリオ・ラモスの話は信憑性に欠ける。ウエルタは反動主義者で、古い連邦軍を指揮して、各地に展開する革命軍と必死の防衛戦の最中であった。しかも、ラモスが所有していた、告訴の原因となった書類は全て憲政軍が支配する地域で作成されていた・・・バシリオ・ラモス逮捕の経緯と、明るみに出た計画に靈感を受けた第三者が改訂版マニフェストを作成し、七月攻撃を起したのではなかろうか・・・事実、マニフェストの起源と、それを作成した著者が余りにも謎に包まれていて・・・テハノへの侵害を正当化するために、テキサス・レンジャースかテキサス・アングロが、計画そのものを偽作、改竄、或いはそっくり捏造したものではなかろうか・・・ラモスを逮捕した者たちが、スペイン語で書かれたオリジナルを改竄し、アングロの間に集団ヒステリーを起させるのに絶大な効果のある、十六歳以上のアングロ殺害と、黒人の暴動を呼びかけることを付け加えたのではなかろうか・・・二つのマニフェストは反乱を組織しようとしていたグループによって作成されたのではなく、一個人が作成したため、作戦本部などは存在しなかった・・・」115

PSDを扇動したとして有罪となったフロレス・マゴン兄弟は1916年6月22日、リカルドとエンリケそれぞれが罰金千ドル及びリカルドが一年と一日、エンリケは三年の禁固刑、控訴審のための保釈金はそれぞれ三千と五千ドルが言い渡された。保釈金は二人の支持者で「母なる大地」の出版者であるエンマ・ゴールドマンが支払った。フロレス・マゴン兄弟は陰謀の嫌疑を否定し、連邦政府も法廷でそれを立証する事は出来なかった。

1917年4月6日、ウイルソンは第一次世界大戦に参戦するや、国内における政府への反対意見を最小限に止める必要を認め、1917年「スパイ活動と敵国との貿易法」

(Espionage and Trading with Enemy Law of 1917)さらに翌年「暴動教唆法」(Sedition Act of 1918)を成立させた。ロシア革命に呼応して急進派が騒然とする中、アメリカは赤の脅威に対処するため、言論の自由を規制し、急進的な発言者や新聞にたいする取締りを強化した。これにより謀議を立証することが容易になった。<sup>116</sup>

1918年3月18日、リヘネラシオンはPLM評議会員、世界の無政府主義者、全ての労働者へ宛てたマニフェストを掲載した。その中で、資本主義は終焉し、ロシア革命が世界を席卷すると書いたため、アメリカ政府はこれを最後に、リヘネラシオンを廃刊に追いやった。リカルドは他にも謀議を企てたとして連邦裁判所は彼に20年の刑を言い渡した。

1920年、政権を握ったオブレゴンは過去の敵と和解を進めていた。オブレゴンは元サパタの助言者で、リカルドの信奉者アントニオ・ディアス・ソト・イ・ガマを介してリカルドに恩給の支払いを受けることを打診した。リカルドは断った。リカルドは無政府主義の信念を曲げようとせず、第一次大戦終了後、友人から恩赦の申請を持ちかけられたのも断った。リカルドはメキシコでの長年にわたる獄中生活で健康を害していたため、カンサス州レヴェンワースの刑務所で彼の病状はさらに悪化し、1922年11月21日、獄死した。

リカルドの死はメキシコで大きな反響を引き起こし、オブレゴンはメキシコ市に連れて帰って埋葬を申し出た。1923年1月、彼は逃亡してから十九年目に遺体となって故国に迎えられた。死によって彼の人気はさらに高まり、列車が止まる先々で人々が集まって敬意を表した。国会ではディアス・ソト・イ・ガマが故人を革命の先駆者として称える演説を行った。しかし、国家的英雄とされるまでには更に長い年月が必要であった。1945年のメーデーの日に、リカルド・フロレス・マゴンの遺骸は国家の英雄たちが眠るメキシコ市のドロレス墓地に移された。<sup>117</sup>

アメリカの急進派はスペイン語がよく理解できなかったことと、南テキサスには社会主義者が余りいなかったことから、PSDの行動が失った土地の回復にあることを理解していなかった。彼等はテキサス襲撃を、アメリカの介入を誘発させるため、アメリカの大企業が仕掛けたものであると理解し、ピヤのコロンバス攻撃はウォール街の悪巧みであると考えていた。陰謀を企てる者が、アメリカがメキシコへ武力介入することを狙って、様々な偽の情報を流している事はウイルソンもよく知っていた。メキシコに巨大な利権を持つサンフランシスコ・クロニクルのウィリアム・ランドーフ・ハーストやLAタイムスのハリソン・グレイ・オーティスはアメリカ国民を刺激する記事を頻繁に書きたてた。アメリカの社会主義者の多くはハーストやオーティスのことを、陰で操る張本人であると信じていた。<sup>118</sup>

サンディエゴ計画については、カランサ陰謀説が有力である。曰く、カランサはメキシコ湾岸の港を拠点にテキサス州に隣接するタマウリパス州を制圧し、アメリカの外交承認

とピヤ軍を主体にした会議派軍の壊滅に必要な武器の確保を計画した。計画の骨子は次のようなものであった。

- 1) 無頼漢にカランサの武器と金を与え、テキサス国境の町を攻撃する。
- 2) アメリカ国務省は無頼漢鎮圧を要求するであろう。
- 3) これに対し米国政府の承認と討伐に必要な武器の提供を求める。
- 4) 承認と武器を得た後、カランサはそれらの無頼漢を逮捕する。

カランサの外交承認と武器獲得のための策略はテキサスの独立運動と言う形となった。<sup>119</sup>

もう一つカランサ説を唱える理由は、明らかにPSDを支援していた憲政軍テキサス＝タマウリパス国境地区総指揮官ジェネラル・エミリアノ・ナファラテを、アメリカの圧力によりマタモロスから移動させるにつき、カランサが彼を昇格させたことである。アメリカの治安当局はカランサの命令を忠実に実行したナファラテへのご褒美であると見做した。更に、当のナファラテが殺害されたことである。これを報じたのはレンジャー・キャプテン・ウィリアム・ハンソンであった。

ハンソンは1866年生まれ、二十二歳のときに保安官代理となって以来一貫して治安関係の仕事につき、1902年にはUSマーシャルに任命された。1906年、再任されたが辞してメキシコで実業界入りし、タンピコやベラクルースで石油と土地の事業に取り組んだ。彼はタマウリパス州都シウダー・ピクトリア近くで三千エーカーのアシエンダ・グアダルーペを手に入れたが、革命のため全て挫折した。不幸は更に重なり1914年、アシエンダはカランサ派によって没収され、短い期間ではあったが、ウエルタ派のスパイ容疑で拘束され、メキシコから追放された。事実ハンソンはメキシコの保守派と長年かかわりを持っていて、反カランサ派からの情報をふんだんに入手していた。サンアントニオに落ち着くと、鉄道警備官、ベクサー郡保安官代理を経て1917年12月24日、スペシャル・レンジャー、更に翌年1月31日、レンジャー・キャプテンに昇格した。

ハンソンはレンジャー副官ジェームス・ハーレーにメキシコに関する情報を数多く送った。その中で、PSDで重要な役割を果たしたナファラテの暗殺を報じている。「信頼できる情報では、ナファラテは数日前までタンピコにいて、カランサにカベヨをタマウリパス州知事として認め、直ちにタンピコへ送ることを要求し、それが叶わない場合は、1915年にナファラテがカランサから受け取った、アメリカ政府にカランサをメキシコ大統領として認めさせるために、テキサスの攻撃を指示した電報、手紙、文書の写しをタンピコの新聞やアメリカ領事に渡す、と脅した。カランサはこれに応じず、ナファラテがタンピコに来て、事を運ぶ前に、手を回して殺したものと思われる」この話は捜査局の握っていた情報とも一致した。ナファラテは1918年4月12日朝3時、タンピコの倉庫で射殺された。<sup>120</sup>

しかし、カランサ説には幾つかの疑問がある。マデロから暴力で政権を強奪したウエルタはウイルソン大統領から承認を得ることが出来ないばかりか、アメリカ政府からあらゆる

る妨害を受けた。カランサの場合は全く異なる。アメリカ政府関係者は、覇権を争っているカランサ、ピヤ、サパタの中で、政権を担うことが出来、しかも信頼できるのはカランサ以外にいないことで、既に意見が一致していた。このことをカランサ自身も充分に知っていた。1914年4月27日、アメリカ陸軍がベラクルース上陸した時、國務長官ブライアンは、チワワ駐在アメリカ領事ジョージ・カロサーズに電報を送り、その頃チワワにいたカランサにウイルソン大統領の立場をわざわざ説明させている。

アメリカ軍がベラクルースに上陸した最大の理由は、ウエルタがドイツやその他の国へ発注した武器や軍需物資を水際で押さえるためであった。米軍撤退時には膨大な武器・弾薬その他の目録を作成し、カランサにそっくり渡した。そのためにカランサは娘婿をベラクルース州知事に据え、受け取るための特別チームを結成して対応した。カランサは殊更アメリカの外交承認を得るための画策など必要としなかったはずである。

1915年10月9日、ランシング國務長官とラテンアメリカ各国の外交官は、事実上メキシコの大統領であるカランサを承認することで一致し、その十日後に公認した。ウイルソンは同時にカランサ以外への武器や物資の輸出を禁じている。それなのに12月から1月にかけて寺沢福太郎がPSD要員を募集し続けたのは何故だろうか。又、PSDがカランサによるトップダウンの画策であれば、カランサの鶴の一声で全てコントロール出来たはずなのに、カランサは何故自分の甥、ジェネラル・リカウトを送り込んで取締りに当らせる必要があったのか。カランサはパブロ・ゴンザレスやナファラテがやっていることを知りながら、彼等が離反するのを恐れて介入しなかったのではなかろうか。ジェネラル・パブロ・ゴンザレス、ジェネラル・エミリアノ・ナファラテ、マウリリオ・ロドリゲス中佐などのカランサ憲政軍上層部は、サンディエゴ計画の起草者ではなかったにせよ、それを計画した者と深い関係があったはずである。

1913年2月、「悲劇の十日間」の謀反により、マデロとピノ・スワレスが暗殺されると、コアウイラ州知事カランサは州議会の承認を得て、3月4日、反ウエルタを表明した。その数日後ウエルタの連邦軍に州都サルティヨを追われ、モンクローバへ逃れた。その途中ラモス・アリスベにあるアシエンダ・グアダルルーペに集まったコアウイラ軍の軍事指導者たちが打倒ウエルタの作戦を練っていた。彼等はベニート・フアレスの1857年憲法に戻ることを標榜して自らを憲政軍と呼び、カランサをその最高指揮官に任命するマニフェストを作成した。カランサはこれを了承し、1913年3月26日、グアダルルーペ計画は署名された。署名者はハシント・トゥレピニョ、ルシオ・ブランコ、セサレオ・カストロ、アルフレド・プレセダであった。<sup>121</sup>

その数ヵ月後、本拠地にしてきたモンクローバの防衛に失敗したカランサ軍は、さらに国境の町シウダー・ポルフィリオ・ディアス（現在のピエドラス・ネグラス）まで退却を余儀なくされた。しかし、コアウイラ州の西の外れ、ヌエボ・レオン州との境にある小さな村カンデラにおいて、7月8日、初めて連邦軍を打ち破り憲政革命の第一歩を踏み出し

た。このカンデラは1690年に集落が出来た古い村で、その三百周年記念の1990年、ジェネラル・パブロ・ゴンザレスの一人息子パブロ・ゴンザレス・ミヤールが「カンデラの歴史的戦闘」と題したエッセーを書いている。その中で、父親はフロレス・マゴンの信奉者であったと記している。<sup>121</sup>

革命前はPLMのメンバーであったパブロ・ゴンザレスは、サンディエゴ計画の創作者ではなかったにせよ、アグスティン・ガルサ、ルイス・デラロッサ、アニセット・ピサニャなどの実行者と深い関わりがあったと思われる。<sup>122</sup>

1906年に熊本移住合資の監督としてラス・エスペランサスに着任した寺沢福太郎は、炭鉱における劣悪な労働条件や、移住者が熊本移住合資及び現地代理人であるユタ州在住橋本大五郎との間で交わした契約内容をめぐる争いなどで嫌気して、早めに見切りを付け、多くの日本人がそうしたように、北に向かったのであろう。国境の町ピエドラス・ネグラスまで来て、アメリカへの入国を拒否され、密入国を思いとどまって、その町で雑貨商を始めた。<sup>123</sup>

パブロ・ゴンザレスのコアウイラ州守備軍との取引が始まったのは、モンクローバから追われた守備軍が、ピエドラス・ネグラスで本拠地を構えた1913年の春から夏にかけてであったと思われる。長いメキシコ革命の間、リオグランデ沿いのアメリカの町は、国外追放された不満分子が反撃の機会を窺って資金集めや勧誘を展開する一方、政権を手にした者は首都から密かに私立探偵を送り込み、反対勢力の動きを探り、時には刺客を送り込んだ。アメリカ側も捜査局のスパイが中立法違反者に目を光らせていた。土地の業者は、革命分派に関係なく、武器、軍事物資、食料、家畜などを売り込んで、一夜で大金を手にした。<sup>124</sup>

寺沢もそのような状況の中で、パブロ・ゴンザレスの憲政軍からの要望に応えることで、大きな商いをし、信用を得て、「得体の知れない物資供給スペシャリスト」として名が知られるようになっていったと思われる。日墨交流史によると、「1914年、北部国境付近の日本人移民の状況を調べて歩いた伊藤敬一にコアウイラ州の様子を詳細に報告したのは寺沢である。また寺沢はカランサ政府の軍関係者とはかなり親身であったようで、カバヨの部隊への日本人の周旋にはかなり高額の資金を与えられていたともいわれ、日本政府によるカランサ政府の承認に際しても、その裏でさまざまな運動をしている。」<sup>125</sup>

1915年1月、ピヤの会議派大統領エウラリオ・グティエレスがピヤと離反し、首都を逃れた混乱に乗じてメキシコ市へ攻め込んだオブレゴンの後を引き継いで、主都防衛総指揮官となったパブロ・ゴンザレスに伴って、寺沢はメキシコ市に移動したと思われる。PSD攻撃が始まった夏から翌年の6月にかけて、恐らくコアウイラ州と首都の間を頻繁に行き来して日本人を募ったのであろうか。パブロ・ゴンザレス配下でサパタ討伐戦に参加した時の小野清長の回顧談が前出「日本人移住史」に載っている。彼によると、「寺沢はちょうどカランサ政府の時に、チワワの方、自分の細君の弟が警視總監で寺沢はその時分

はたいしたものだった。日本人を集めてカランサの軍に売り込んだのは知らない。私の知っている寺沢は警視總監の義弟で、彼は何か少佐待遇で、何もしないでアヘンテ、警視庁で刑事で一等二等三等とがあるんですよ、その一等の刑事の部長か何かで、あの時分15ペソ位貰っていたんじゃないかな、その下に宮部というのがいた・・・何しろ代理公使が寺沢にビクビクしていたんだから・・・」小野清長によると、寺沢はカランサ政府時代には巾を利かせていた。カランサが駄目になってからも内務省との関係を保ち、うまくやっていたらしい。

吉田俊二によると、PSD参加当時寺沢は自分たちの集会所にも顔を出したが、その後は全然会わなかった。しかし1930年ごろ寺沢と偶然に会った時の事を次のように記している。「・・・彼の住んでいたブカレリー街の横の方の小さい通りへ行き、それから彼が指圧療法かなんかしていたガンテ街の現在の銀行の前の建物の中に治療所をもっておった方へも同道して種々な昔話をして帰った。其の後は再会せず彼が何時死去したかも知らない。」<sup>126</sup>

112. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-1923", University of Oklahoma Press, 1992, P82
113. Ibid. P83
114. Benjamin Heber Johnson, "Revolution in Texas, How a Forgotten Rebellion and its Bloody Suppression Turned Mexicans into Americans", Yale University Press, 2003, P80-81
115. Ibid. P92
116. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-1923", University of Oklahoma Press, 1992, P167
117. Ibid. P169
118. Ibid. P159
119. Robert Mendoza, "The Lonsome Death of Jesse Mosley, Laredo 1916", LareDOS, Vol. XI #1, P2
120. Charlehs H. Barris III and Louis R. Sadler, "Texas Rangers and the Mexican Revolution", University of New Mexico Press, 2002, P391
121. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P341
122. Ing. Pablo Gonzalez Millar, "La Historica Batalla de Candela", [historia.coahuila.gov.mx/](http://historia.coahuila.gov.mx/) 1990 P1
123. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室、1990、P289
124. Robert Mendoza, "The Plan de San Diego: The Border Raids of 1915-1916", Magazine Article Sept. 5, 2005, P2
125. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室、1990、P408
126. 日本人メキシコ移住史編纂委員会、「日本人メキシコ移住史」1971、P154